

鍼灸実習における不安全行動の実態と教員と学生のリスク認知の比較

菊池 勇哉

【序章】

鍼灸(しんきゅう)療法は、鍼(はり)や艾(もぐさ)を用いる医療であり、伝統医学や補完代替医療として位置づけられている。一般的に、鍼灸療法における有害事象(医療事故)の発生リスクは小さく、鍼灸の安全性は高いとされているものの、鍼灸施術によって患者が死亡してしまう事故もこれまでに報告されている。このような重大な有害事象が起こる背景には、人間の不安全行動およびそれに関わる心理的要因の存在が考えられる。しかし、鍼灸療法の安全に関する研究では、事故事例の報告、有害事象の収集や発生頻度の調査が大半であり、有害事象発生の背景にある人間の行動の実態や心理的要因に焦点を当てた研究は見当たらない。本論文では、鍼灸師養成校における学生の不安全行動の実態を明らかにするとともに、そのような行動に影響を及ぼす心理的要因について検討することを目的として、以下の研究1～研究4を行った。

【2章 研究1 観察による鍼灸実習における学生の不安全行動の実態把握】

2章では、鍼灸実習における学生の不安全行動の実態を把握することを目的に、実習時の学生の行動について観察調査を行った。計18名を対象とした結果、「直前の手指消毒をしない」「抜鍼後に刺鍼部位を消毒しない」「汚染可能性物質への接触」「患者役が靴下や素足のまま床に降りる」「取り出した消毒綿花を容器に戻す」などの計14種類の不安全行動が抽出された。これらのうち、生起者数が相対的に多かったのは、「直前の手指消毒をしない」「直後の手指消毒をしない」「汚染可能性物質への接触」「患者役が靴下や素足のまま床に降りる」「触る必要がない時に患者役に触る」の5種であった。1分あたりの生起頻度は「直前の手指消毒をしない」「直後の手指消毒をしない」「汚染可能性物質への接触」が高かった。本研究によって、学生が実習時に実行しやすい不安全行動の実態を明らかにすることができ、それらの行動が意図的なのか、非意図的なヒューマンエラーなのかに対する考察を行ったものの、その行動の背景にある心理的要因に関する言及は不十分であった。

【3章 研究2 実習時に観察された不安全行動に対する学生のリスク認知】

3章では、観察の結果にて得られた不安全行動に対して、主観的な実施頻度、不安全行動に伴う危険の重大性と確率、その不安全行動によって得られるメリットの4種の主観指標について、学部1年生から4年生までの学生を対象に質問紙調査を実施した。77名を対象に調査した結果、学生において不安全行動に最も強く影響を与えている要因は「重大性」、「確率」のリスク認知要因であり、次いで「メリット」であった。また、学年間の差については、多くの行動について、1年生が他学年と比較して「重大性」「確率」というリスク認知が高かった。したがって、学年が上がり、知識の増加や実習経験を積むことによってリスク認知が低下し、結果として不安全行動を敢行しやすくなる可能性が示唆された。しかし前述の通り、鍼灸における有害事象の発生リスクは小さいため、経験が少ない1年生がリスクを過大に認知している可能性がある。

【4章 研究3 実習時の不安全行動に対する教員と学生のリスク認知の比較】

4章では、3章の問題点を踏まえ、学生のリスク認知の適切さを評価するために、鍼灸養成校にて教鞭

をとる教員 31 名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、研究 2 と同様に、鍼灸実習時の不安全行動に対する教員の主観的「頻度」、「重大性」、「確率」、「メリット」の程度を評価するものであった。3 章にて得られた学生の結果と比較検討を行うとともに、教員において、これら心理的要因と不安全行動の主観的頻度との関係を検討した。教員の各不安全行動の生起に影響を与える要因も検討し、学生の生起要因と比較した。その結果、多くの不安全行動において、学生よりも教員のリスク認知が低かった。また、学生においてはリスク認知が多くの不安全行動を強く説明するという 3 章の結果に対し、教員においては、リスク認知ではなく「メリット」の影響が強いことが明らかとなった。したがって、学生が経験・知識の増加に伴いリスク認知が教員に近づく(リスク認知が低下する)ことを意味する一方で、教員がメリットを優先して不安全行動を敢行している可能性があることから、指導する教員のリスク認知の低さを原因として学生のリスク認知の低下、不安全行動の敢行が生じている可能性を示唆した。

【5 章 研究 4 実習時の不安全行動の実際の行動頻度と主観的行動頻度のずれ】

5 章では、2 章での観察調査で得られた不安全行動の頻度(実行動)と、3 章、4 章にて測定した主観的な心理指標とのつながりについて、観察調査および質問紙調査の両方に参加した学生 18 名を対象に検討した。結果、「直前の手指消毒」において、実際の行動頻度と、「重大性」に有意な負の相関が認められ、生起者のみでの「靴下や素足のまま床に降りる」において実際の行動と主観的頻度に有意な正の相関が認められた。

【6 章 総合論議】

本論文における一連の結果から、鍼灸実習時における不安全行動の実態が明らかになるとともに、学生と教員における不安全行動に対する心理的要因の差異について検討することができた。特に、学生のリスク認知は、知識や経験の増加(学年の増加)に伴い低下する傾向にあること、教員のリスク認知が学生よりも低く、行動に対するメリットの影響がより強かった。このことから、学生のリスク認知の低下・不安全行動の敢行は、教員の指導や態度の影響を受けている可能性が指摘された。したがって、鍼灸業界全体の安全性を高めるためには、鍼灸師を輩出する養成機関の教員に対する再教育の機会を設ける必要があると考えられる。同時に、リスク低減のために複雑化している現行作業工程の見直しも必要になるかもしれない。

今後は、教員や現場の臨床に携わる鍼灸師に対して、実行動指標としての不安全行動の抽出および心理的背景の解明の研究を実施するとともに、本研究では扱わなかった「灸術」に関する実態調査や要因分析等の必要性が示唆される。(安全行動学)